



第41号

令和8年9月1日

発行 聖マリアの園

〒853-0052

五島市松山町 706-3

(0959)72-6129

特別養護老人ホーム聖マリアの園 施設長 村上順子

令和8年度が始まって、もう半年が経過してしまいました。その間、熊本県地震、千葉豪雨等で被災してしまつた関係者の皆様方々には心よりお悔やみ申し上げます。自然災害には人間の力は抗うことができません。しかし、のど元過ぎるといつの間にかその怖さを忘れがちです。準備をしても間に合わないときもあります。人間の力を過信せず謙虚さを保ちつつ平凡な日常生活を送っていききたいものです。

今年もあと四ヶ月となつてしまいました。この間、何をどう過ごしてきたのか、自問自答しながら生活している現在です。また、今夏の暑さは厳しく雨らしい雨も降らない日々が続いています。自然災害の恐ろしさは刻一刻身近になつていくようです。また、地震大国である日本は各地で地震が起つてます。同じように台風も次から次へと日本周辺に向かって来ます。今年はまだ、北部九州には台風等は到来してませんが、常に災害等の情報、予防策と共に備えを怠らないようにして行きたいものです。

ところで、ある雑誌に目が留まりました。その中に井上陽水氏の「少年時代」の曲の前半部分に「夏が過ぎ風あざみ 誰のあこがれにさまよう 青空にのこされた 私の心は夏模様」この歌詞を目にしたとき、いろんな思いがあるかと思うが、今年は夏の酷暑日の日が続いて、いつ終わるのかもわからないような夏の暑さにうんざりした日々でした。私のこじつけだが、いつかは「少年時代」の歌詞のようにこの暑さも通り過ぎて、思い出の時を刻んで

いくのだろうかと思う。そんな思いの中で一ミリでもいいので雨が待ち遠く思える日々である。

話は変わるが、私事であるが、以前一緒に働いていた同僚が病に倒れて今、ホスピス病棟に入院しているとのこと。思えば、その同僚はいつも笑いに満ちていたというより、人を楽しくさせる人であった。普段は何か、とぼけているように見えても人を笑わせる種を自分の周りに蒔いているような人である。ホスピス病棟に行つた過程はわからないが、突然のことで信じがたい思いである。私の心は、この間、仕事の合間や祈りの時はいつも彼女のことが思い出される日々で彼女との一つ一つの出来事が走馬灯のようにかけめぐっていく。今までは、人の死についてはなぜか心に余裕もって接していたように感じるが、今回彼女との間には、祈りという深い絆で結ばれているような感がある。彼女側から見るとそんな固い絆は無いと言われればそうかもしれないが、彼女との出会いが私にとっては心の中に一つの小石を投げられ、それが波紋のように打ち寄せてくる感がある。彼女との出会いは数十年前で、彼女が修道女を目指すために私たちの集いに加わつたことから始まる。彼女が私たちのところに来たのは、あるお店で働いていたところに、今は高齢者であるシスター（以前は修道会の会長職を務めていた方）の声掛けで、私たちの輪に加わつたことが発端で一年半ぐらい寝食を共にして過ごしたことがあり、又先述した通り、同じ職場にいたことも有つて他人事とは思われない気がして心が騒ぐ思いである。生死を伴う仕事に表裏一体で関わる中で彼女の姿が、「少年時代」の歌詞と重なりつつあるのを覚える日々である。

